2026年度 第6回（11月）北辰テスト対策 予想問題　解答・解説

国語

1　問1（4点）

イ

①の直前・直後に根拠がある。
・直前: 伴奏者に選ばれた経緯（先生に勧められた）
・直後: 「クラス全員の歌声を支える役目の重さに、陽菜はまだ慣れていなかった」
・イ「クラス全員の歌声を支える役割の重さにまだ慣れておらず、演奏の失敗を恐れている」が正答
・ア「後悔し、役割を代わってほしい」は本文にない（むしろピアノ自体は「好き」とある）
・ウ「美月の指揮が下手なせい」は本文と矛盾（ずれているのは陽菜のテンポ）
・エ「演奏技術に自信がなく、基礎から練習し直したい」は本文にない
採点ポイント: 不安の原因が「演奏技術」ではなく「役割の重さ」にあることを読み取れているか。

1　問2（4点）

イ

②の直後に「励ましのつもりなのか、それとも本当にいらだっているのか、美月の表情からは読み取れなかった」とあり、陽菜が美月の真意を判断できず戸惑っている様子が直接示されている。
・イ「美月の言葉が励ましなのか苛立ちなのか判断がつかず、戸惑っている」が正答
・ア「見捨てられた」「友情が終わった」は本文にない（強度過剰）
・ウ「すぐに練習をやめたい」は本文にない
・エ「腹を立て、反論しようとする」は本文にない（直後の発言「美月だって、指揮……厳しくなった」は反論というより戸惑いの表明）
採点ポイント:「読み取れなかった」という直接描写を見落とさないこと。

1　問3（6点）

(例) 自分の指揮一つでクラス全員の歌が変わってしまう責任がこわい（29字）

正答例:
・(例1) 自分の指揮一つでクラス全員の歌が変わってしまう責任がこわい（29字）
・(例2) 指揮者としてクラス全員の歌の出来を左右する責任がこわい（27字）
根拠: ③の直前「指揮者になってから」、直後の文脈全体で、自分の腕の振り方ひとつで合唱全体が変わってしまうという責任の重さへの恐れが語られている。
採点基準:

要素	配点内訳	判定基準
①「責任」が使えている	1点	指定語必須
②「こわい」が使えている	1点	指定語必須
③ 指揮（腕の振り方）がクラス全体の歌を左右するという内容が示されている	2点	「指揮ひとつで」「腕の振り方で」等
④ その重さ・責任への恐れという帰結が示されている	1点	「こわい」の対象が明確であること
⑤ 25〜35字の字数を守っている	1点	逸脱は減点

指定語の使用順序は問わない。

1　問4（4点）

ア

④の直前で、美月が「こわくなった」と打ち明け、陽菜も「わたしも同じ」と応じている。一人で抱えていた不安を美月と分かち合えたことで、手の緊張がやわらいだと読み取れる。

・ア「美月も自分と同じように不安を抱えていることを知り、一人で抱え込まなくてもよいと感じている」が正答

・イ「弱みを見せたことを後悔」は本文にない（むしろ安心の方向）

・ウ「練習そのものが不要」は本文にない（この直後も練習を続けている）

・エ「自分の責任がなくなった」は言い過ぎ（責任がなくなったわけではなく、ともに抱える形になった）

採点ポイント: 「不安がなくなった」のではなく「一人ではなくなった」という変化を捉えているか。

1　問5（5点）

ア

⑤の直前、美月と「お互い、こわいまま」「一緒にこわいなら、なんとかなる」と気持ちを分かち合い、最後の一回は「今までで一番、ピアノと指揮がぴたりと合っていた」。不安が消えたわけではなく、二人で進めるという安心感から足取りが軽くなったと読める。

・ア「不安を抱えたままでも二人で進んでいけると感じ、気持ちが軽くなっている」が正答

・イ「不安が一切なくなった」は言い過ぎ（こわいままで、と語られている）

・ウ「もう練習をしなくてもよい」は本文にない

・エ「責任から解放され」は本文にない（責任は分かち合われただけで、なくなってはいない）

採点ポイント: 「不安の消失」ではなく「不安を分かち合えたことによる安心」という質の違いを区別できているか。

1　問6（5点）

ウ・オ

・ア: 陽菜と美月の会話のやり取り（「ごめん、もう一度」「わたしも同じ」等）を通して、互いの不安が明らかになっていく構成→適切

・イ: 「指先から体中に広がっていく」は不安という感情を身体感覚で表した比喩的表現→適切

・ウ: 本文は終始「陽菜は」「陽菜はうつむいた」のように陽菜の内面に寄り添って語られており、美月の視点からの語りではない→不適切→正答

・エ: 「お互い、こわいまま」（美月）と「一緒にこわいなら」（陽菜）という言葉が響き合い、二人が不安を分かち合う関係に変化したことを印象づけている→適切

・オ: 回想場面はなく、放課後の練習から音楽室を出るまでの出来事が時間の流れに沿って描かれている→不適切→正答

採点ポイント: ウ・オの2つを両方選んで正答（5点）。過不足があれば0点（部分点なし）。

2　問1(1)（2点）

こくめい

克明＝細かいところまで念入りであること。

採点ポイント: 「こくめい」以外の読みは不正解。

2　問1(2)（2点）

うるお（す）

潤す＝水分や恩恵を与えて豊かにする。
採点ポイント: 送りがな「す」まで含めて「うるおす」。「じゅん（す）」等の音読みは不正解。

2　問1(3)（2点）

保護

採点ポイント: 「護」の字形（言＋蒦）の書き誤りに注意。

2　問1(4)（2点）

検討

採点ポイント: 同音の「見当」との書き誤りに注意（「見当」は見込み・推測の意で、ここでは「調べて考える」意味の「検討」が正しい）。

2　問2(1)（2点）

エ

「真偽をカクニンする」＝確認（確）。ア資格（格）／イ各地（各）／ウ核心（核）／エ確実（確）✓。すべて「カク」と読むが、「確認」と同じ漢字を含むのはエのみ。
採点ポイント: 同音の別漢字（格／各／核）を音だけで選ばず、意味から書き分けられるか。

2　問2(2)（2点）

ア

「薬をセイゾウする」＝製造（製）。ア製作（製）✓／イ成績（成）／ウ政策（政）／エ清潔（清）。アとウはどちらも「せいさく」と読むが漢字が異なる（製作／政策）ことに注意。アは部品などの実用品をつくる意味なので「製作」（絵画・番組などの作品をつくる「制作」ではない）。「製造」と同じ漢字を含むのはアのみ。
採点ポイント: 読みが同じ「せいさく」でも、文脈から正しい漢字（製作か政策か）を判断できているか。

2　問3（3点）

ア・オ

活用形の識別。文末や、特定の助動詞・助詞に接続する形で判断する。
・ア 「降る」＝文末で言い切る形→終止形 ✓
・イ 「忘れ」＝「て」に接続→連用形
・ウ 「気づき」＝読点（、）で文を続ける形→連用形
・エ 「届け」＝あとに「た」が続く→連用形
・オ 「話す」＝伝聞の助動詞「そうだ」は終止形に接続する→終止形 ✓
・カ 「行こう」＝意志の助動詞「う」は未然形に接続する（行こ＋う）→未然形
採点ポイント: ア・オの2つ全てを選んで正答（3点）。過不足があれば0点（部分点なし）。「話すそうだ」の「そうだ」が終止形接続である点が見分けの鍵。

2　問4（3点）

ア

連体詞は活用せず、体言（名詞）を修飾する働きのみを持つ。形容詞は活用し、言い切りの形が「い」で終わる。

・ア 「小さな」＝活用せず（「小さなだ」等にならない）、体言「子ども」を修飾するのみ→連体詞 ✓
・イ 「小さい」＝「小さかった」等に活用する→形容詞
・ウ 「大きい」＝「大きかった」等に活用する→形容詞
・エ 「美しい」＝「美しかった」等に活用する→形容詞

採点ポイント: 「小さな／大きな」は活用しない連体詞、「小さい／大きい」は活用する形容詞という対の区別が最大の分かれ目。

2　問5（3点）

イ

「塵も積もれば山となる」＝小さなことでも積み重ねれば、やがて大きな成果になるという意味。毎日少しずつ練習を続ける後輩への声かけとして適切→正答。

・ア「石橋をたたいて渡る」＝用心深く物事を行うこと
・ウ「二階から目薬」＝効果が薄く、もどかしいこと
・エ「棚から牡丹餅」＝思いがけない幸運が舞い込むこと

採点ポイント: 「積み重ねの効果」という文脈に合うことわざを選べているか。

2　問6（2点）

エ

「気を取り直す」＝一度くじけそうになった気持ちを立て直すこと。緊張していたが仲間の声援で立て直せた、という文脈に合う→正答。

・ア「肩を落とす」＝落胆すること
・イ「腹をくくる」＝覚悟を決めること（声援によって受け身に立て直す場面にはやや合わない）
・ウ「息をのむ」＝驚きや緊張で一瞬息を止めること

採点ポイント: 「くじけそうな気持ちを立て直す」という文脈との一致。

2　問7(1)（3点）

イ

空欄Ⅰは「(司会が) 先生にこの企画について〔Ⅰ〕たい」＝自分の「聞く」動作をへりくだる謙譲語が必要。

・ア 「申し上げ」＝「言う」の謙譲語。「聞く」の意味にならない
・イ 「伺い」＝「聞く・尋ねる」の謙譲語「伺う」で適切→正答
・ウ 「おっしゃり」＝「言う」の尊敬語。自分の動作に使うのは誤り
・エ 「ご覧になり」＝「見る」の尊敬語。意味も合わない

採点ポイント: 自分の動作には謙譲語、相手（先生）の動作には尊敬語を使うという基本の区別と、謙譲語の動詞そのものの意味（伺う＝聞く・訪ねる）の両方を問う。

2　問7(2)（2点）

ア

田中さんが「全員分をまとめるのは時間がかかりそうだね」と心配を示したあと、司会は「先生にもこの企画について伺いたい」と述べ、意見を聞く場を設けようとしている。

・ア「田中さんの心配を受けて、先生の意見を聞く場を設けようとしている」→正答
・イ「そのまま採用し、すぐに作業を始めるよう指示」は本文にない
・ウ「田中さんの発言を無視」は事実と反する
・エ「先生の意見を聞かずに独断で決める」は事実と反する（まさに先生に意見を求めている）

採点ポイント: 出された心配や疑問を受けて、次の一手（先生への相談）につなげる司会の進行技術を読み取れているか。

3　問1（4点）

イ

①の直後に根拠がある。「マメ科の雑草の根には、根粒菌という細菌が共生しており、植物の成長に欠かせない窒素を土壌に供給している」。

・イ「マメ科の雑草の根に共生する根粒菌が、空気中の窒素を土壌に供給する」が正答
・ア「葉が直接吸収し、光合成で変える」は本文にない
・ウ「根が腐ることで作られる」は本文にない（共生する細菌の働きであり、腐敗の話ではない）
・エ「他の植物から養分を奪う」は本文にない（窒素は空気中から取り込まれる）

採点ポイント: 「根粒菌という細菌の共生」という具体的なしくみを正確に選べているか。

3　問2（4点）

ア

②の直後に「雑草を完全に取り除いてしまうと、昆虫が立ち寄る場所が減り、結果として農作物の実りにも影響が出ることがある」とある。

・ア「昆虫が畑に立ち寄る場所が減り、農作物の花粉を運ぶ働きが弱まるおそれがある」が正答
・イ「昆虫が完全にいなくなる」は言い過ぎ（本文は「影響が出ることがある」という程度の表現）
・ウ「作業に時間がかかる」は本文にない
・エ「窒素が急激に失われる」は①の話題であり、②の文脈（花粉を運ぶ昆虫）とは別の論点

採点ポイント: ②の段落の話題（花粉を運ぶ昆虫）に対応する問題点を選べているか（①の窒素の話と混同しないこと）。

3　問3（6点）

(例) 畑の土を育てながら、昆虫を呼んで花粉の運び手を増やしている（29字）

正答例:

・(例1) 畑の土を育てながら、昆虫を呼んで花粉の運び手を増やしている（29字）

・(例2) 土を育てて豊かにし、昆虫を呼んで農作物の実りを支えている（28字）

根拠: ①段落（根粒菌による土への窒素供給＝土を育てる）と②段落（昆虫を集め、花粉を運ぶ手伝いをする）の二つの働きをまとめる。

採点基準:

要素	配点内訳	判定基準
①「土」が使えている	1点	指定語必須
②「昆虫」が使えている	1点	指定語必須
③ 土を育てる（豊かにする）という内容が示されている	2点	「土を育てる」「土を豊かにする」等
④ 昆虫を呼んで花粉を運ぶ（農作物を支える）という内容が示されている	1点	「昆虫を呼ぶ」「花粉を運ぶ」等
⑤ 25〜35字の字数を守っている	1点	逸脱は減点

指定語の使用順序は問わない。

3　問4（4点）

ア

④の直後に「雑草もまた、土を育て、虫を呼び、生き物同士のつながりを支えている、生態系の一員なのである」と述べられている。

・ア「雑草が土を育て、昆虫を呼び、生き物同士のつながりを支えているという、生態系の一員としての役割」が正答

・イ「作業の時間と労力」は本文にない

・ウ「光や水分を奪う」は雑草管理が必要な理由として挙げられた事実であり、④の「見えてこないもの」ではない

・エ「生えやすい土地の条件」は本文にない

採点ポイント: ④の直後の一文を根拠として正確に対応づけられているか。

3　問5（5点）

イ

「適切でないもの」を選ぶ問題。

・ア: 冒頭「『雑草』と聞くと……思い浮かべる人が多いだろう」という一般的な思い込みを示し、それをくつがえす展開になっている→適切

・イ: 本文に実験・数値データは登場しない（根粒菌や昆虫の働きは定性的に説明されるのみ）→不適切→正答

・ウ: 根粒菌（窒素供給）や昆虫（花粉を運ぶ）の具体例で、雑草の役割を説明している→適切

・エ: 「雑草を放置しておけばよいという話ではない」と管理の必要性にも触れつつ、単純な見方を広げることの大切さを述べている→適切

採点ポイント: 「具体例がある」ことと「数値データで科学的に証明している」ことの区別。

3　問6（5点）

イ

本文全体の主旨:

・雑草＝邪魔者という思い込みをくつがえし、土を育て昆虫を呼ぶという役割を紹介

・一方で、光・水分・養分を奪う面もあるため適切な管理は必要

・結論:「雑草＝すべて取り除くべき邪魔者」という単純な見方をやめ、生態系の一員として付き合い方を考えることが大切

・イ「土を育てたり昆虫を呼んだりする役割を持つ一方で、農作物の養分を奪うこともあるため、敵か味方かを決めつけず付き合い方を考える必要がある」＝結論と一致→正答

・ア「必ず増える」は言い過ぎ（本文にない断定）

・ウ「有害な存在」「完全に取り除くことが望ましい」は本文の主旨と正反対

・エ「どの植物の根にも共生する」は本文にない（根粒菌が共生するのはマメ科の雑草の根）

採点ポイント: 役割と管理の必要性、両方に目を配った筆者の均衡のとれた主張を捉えているか。

4　問1（4点）

あらそいやまず

「争ひ」の「ひ」は語中のハ行。歴史的仮名遣いでは、語中・語尾の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は現代仮名遣いで「わ・い・う・え・お」に直す。

・争（あらそ）ひ → あらそい

採点ポイント: すべてひらがなで「あらそいやまず」と書けて正答。「あらそひやまず」（直し忘れ）は不正解。

4　問2（4点）

イ

②の直前に「しばし思案して」とあり、すぐに結論を出すのではなく、根の在る場所という「ものの由来」を確かめることで判断の手がかりを得ようとしていることがわかる。そのことは、直後の③の裁定（根を養った者のものと言うべし）の前提になっている。

・イ「蔓がどこから生まれ、育っているのかを確かめることで、瓢の実の所有を判断する手がかりを得ようとしたから」が正答

・ア「根の場所だけですぐに決めようとした」は、実際には根の「養い」という理屈を経て判断しているため不十分

・ウ「うそをついているかがすぐわかる」は本文にない

・エ「蔓の長さを測る必要がある」は本文にない

採点ポイント:「しばし思案して」という、すぐに断定しない態度を踏まえられているか。

4　問3（4点）

(例) 根が蔓に養分を与え続けた（12字）

正答例:

・(例1) 根が蔓に養分を与え続けた（12字）

・(例2) 太郎の畑にある根が養分を与えた（15字）

根拠: ③「根の養ひあれば、蔓は伸び、実はなるなり。されば、瓢三つながら、根をやしなひたる太郎がものと言ふべし」。根が養分を与えることで蔓が伸び実ができる、という因果関係を根拠に、根のある太郎の物と判断している。

採点基準:

要素	配点内訳	判定基準
① 根が養分を与える（養う）という内容が示されている	2点	「養分を与える」「養う」等
② その結果、蔓が伸び実ができるという内容、または太郎の畑の根であるという対応が示されている	1点	「蔓に」「太郎の根が」等
③ 現代語として自然で、10〜20字の字数を守っている	1点	古語の残存・字数逸脱は減点

4　問4（4点）

イ

④「一つのものを、もとより我がものと思ひ定めて争ふよりも、そのものがいかにして出で来たるかを問ひ尋ぬることこそ、まことの知恵なれ」をそのまま言い換えた選択肢を選ぶ。

・イ「一つの物を最初から自分の物だと決めつけて争うよりも、その物がどのようにして生まれたのかを問うことこそ、本当の知恵である」が正答

・ア「声の大きい者を信じる」は本文にない

・ウ「半分ずつに分ける」は本文の裁定（根を養った太郎に二つ、次郎に一つ）と異なる

・エ「自分では何も考えないほうがよい」は本文にない（長自身が「問ひ尋ぬる」という思考の過程を示している）

採点ポイント: ④の一文を正確に言い換えた選択肢を、本文にない要素を含む他の選択肢と区別できているか。